

小学校家庭科における 知的活動の基盤づくりと生活への感性を育む言語活動の検討

森下 友紀 鈴木 明子 行友 圭子 高畑 律子

1. はじめに

平成20年3月に公示された学習指導要領の総則¹⁾では、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、各教科を貫いて児童の言語活動を充実させることの重要性が示された。このような学習指導要領の改訂を受け、家庭科の目標にせまるための方法として、言語活動をどのように充実させたらよいのか、位置付けたらよいのかという実践面での課題も示された²⁾。

また、文部科学省『言語力の育成方策について（報告書案）』³⁾において、「子どもを取り巻く環境が大きく変化する中で、様々な思いや考えをもつ他者と対話をしたり、我が国の文化的伝統の中で形成されてきた豊かな言語文化を体験したりするなどの機会が乏しくなったために、言語で伝える内容が貧弱なものとなり、言語に関する感性や知識・技能などが育ちにくくなってきている。このため、言葉に対する感性を磨き、言語生活を豊かにすることが大変強く求められている。」とある。家族や生活を学習対象として、体験を重視している家庭科の学習において、教科独自の言語活動を充実させることは、上記の教育課題に応じていくために重要な役割を果たすことにつながっていくと考えられる。

家庭科教育の目的を「生活実践力」の育成ととらえ、「具体的な生活の場面で、自分の願いとそれぞれの生活状況に照らし合わせながら、科学的、合理的な根拠に基づいて習得した知識や技能を活用して、思考、判断、意思決定を行いながら課題を解決し行動する力」の育成を目指す場合、知的活動（論理や思考）やコミュニケーション、感性・情緒の基盤といった言語の役割を踏まえて、どのように言語活動を充実させたらよいのだろうか。

製作、調理などの実習や、実験、観察、見学、調査、研究などの実践的・体験的な学習活動を通して学ぶことは、教科の目標を実現するにあたり重要となってくることは言うまでもない。しかしながら、それらが、

真の学びとなるためには、ただ単に楽しかった、おいしかった、できたということにとどまらず、その背景にある科学性や価値に気づくことが大切である。そのような場面を仕組み、授業の質を高めていくためには、授業者が意図的に効果的な言語活動を取り入れていくことが不可欠である。本報では、小学校家庭科における目標の実現のために、言語が果たす役割を踏まえて、どのように言語活動を取り入れたらよいのかを検討して授業を構想し、それらの実践と成果について報告する。

2. 言語活動を取り入れた授業設計の視点

言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】（文部科学省 2011年）⁴⁾では、言語の役割を踏まえた言語活動の充実について、「知的活動（論理や思考）に関すること」と「コミュニケーションや感性・情緒に関すること」の2つの観点から述べている。

家庭科の学習においては、知識や技能を活用して生活の課題を解決する能力を育む観点から、「知的活動の基盤」としての言語が果たす役割が大きい。

一方で、「生活実践力」の育成を目指す場合、児童それぞれの生活実態が家庭科学習の根底にあり、家族との生活を大切にしたいと願う心情やそれぞれの価値観を取り上げて、「生活への感性を育む」こともまた重要である。これまで受け継がれてきた生活に関係のある様々な言語も体験を通して理解させたい。「知的活動の基盤としての言語活動」と「生活への感性を育む言語活動」は、家庭科でも相互に関連しながら育まれていくと考えられる。

これら2つの言語の役割を踏まえ、学習指導要領解説や諸説に基づいて、小学校家庭科における言語活動を具体化すると次の通りである³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾。

【知的活動の基盤としての言語活動】

①衣食住の知識や技能に関する言葉を実感を伴って理解する活動

「生活実践力」を育むために、基礎的・基本的な知

識や技能の習得が重要であることは明らかである。しかし、技能の習得には、多くの時間と繰り返しの訓練が必要である。限られた学習時間の中で、多くの技能を確実に身につけるために費やす時間を確保することは困難である。したがって、知識や技能の原理や科学性を学び、それらを場面に応じて合理的に活用していく面白さや必要性を実感させることが重要である。

小学校家庭科で学ぶ知識や技能は、児童にとって生活の中でよく目にし、中には経験したことがある場合も少なくない。そのような日常生活や技能を主体的に言語化することで、改めて認知したり、科学的に理解したりすることは、実生活の場面で活用できる知識や技能とするために重要である。知識や技能に関する言語を実習や実験などを通して実感をともなって理解したり、逆に言語を用いることが知識や技能の習得の手助けとなったりすることも考えられるであろう。

②生活の課題を解決するために習得した科学的な知識や技能を基に考えたり説明したりする活動

家庭科における問題解決的な学習は、従来から重視されてきた学習方法である。思考による問題解決過程だけでなく、行動による過程も含まれる場合が多い。生活を見つめ課題をとらえ、基礎的・基本的な知識や技能を習得し、それらを活用して解決し評価をするといういくつかの学習場面が考えられるが、それぞれの展開において、言語活動を充実させることが重要である。特に、知識や技能をどのように活用するかを判断し、意思決定する力は、生活実践力を育む上で直接的に重視される力である。言語で説明して協同的に解決をしたり、その過程を客観的にとらえて言語で表現したりすることを意図的に取り入れることが大切である。

③衣食住など生活の中の様々な情報を収集し、適切に読み取り判断する活動（情報活用能力の育成）

家庭生活の中で生きて働く情報活用能力は、「生活の中の様々な媒体を通して得られた情報を生活の文脈の中で有効に活用する」ことであろう。例えば、食品を購入する場合、パッケージの情報やテレビコマーシャル、広告などから食品の品質や値段を適切に把握し、目的に合わせて購入するかどうかの判断材料とすることが考えられる。衣生活に関する学習では、洗濯洗剤の説明を適切に読み取り、洗濯に活かすことが考えられる。日常には様々な情報があふれており、それらを主体的に読み取り取捨選択して生活に活用しようとする能力の育成が求められる。

【生活への感性を育む言語活動】

④生活に関する事柄や感覚を豊かな言語で表現する活動

味の感想を「おいしい」あるいは「まずい」としか表現できない児童は少なくない。言語を豊かに使いな

がら味を表現することは、食生活への感性を豊かにし、食文化への関心を高めると考えられる。調理に関する知識や技能の向上にもつながっていくであろう。生活の中で五感を通して感じたことを言語で表現することは、日常生活の様々な事柄を価値あるものとして認知したり、コミュニケーションを図ったりする上で、大切であると考えられる。

⑤友達や家族との対話的なコミュニケーション活動

意思伝達機能としての言語に注目すると、家庭科では、家族との団らん、地域との触れ合いなどを通して、人とのコミュニケーションを図るための言語活動は不可欠であり、この側面からの検討も必要である。

小学5、6年生は、家族とのコミュニケーションが少しずつ難しくなってくる発達段階でもある。家族との関わりを大切にしながら家庭生活の営みに協力する態度を育てるために、自分の家族とのコミュニケーションをいかに築いていくかという視点での授業づくりが必要になってくる。

3. 授業の実際

(1) 知的活動の基盤づくりのための授業例

【知的活動の基盤としての言語活動】、③衣食住など生活の中の様々な情報を適切に活用する活動（情報活用能力の育成）に着目した具体的な学習活動の展開およびその成果について述べていく。

〈家庭科学習指導案〉

（指導者 広島大学附属小学校教諭 森下 友紀）

1) 日 時 平成23年10月～11月

2) クラス 広島大学附属小学校 2部6年
(男子20人、女子20人、合計40人)

3) 題材名 「おやつ選び方を考えよう」

4) 学習指導計画（全5時間）

第一次 おやつのパッケージやテレビCMからどんな情報が得られるだろうか。（2時間）

第二次 目的に合わせておやつを選ぼう。（1時間）

第三次 おやつを買うことと手作りするもののそれぞれのよさを調べよう。（2時間）

5) 題材の目標

○おやつのお買い方、手作りする事などに関心を持ち、より適切におやつを選ぼうとしている。【家庭生活への関心・意欲・態度】

○購入しようとする加工食品の品質や価格などの情報を活用して、目的に合った選び方について考えたり、自分なりに工夫したりしている。【生活を創意工夫する能力】

○購入しようとする加工食品の品質や価格などの情報

を集め、整理することができる。簡単なおやつ(ジャムロールサンド)を作ることができる。【生活の技能】
○加工食品の品質や価格などの情報の集め方や意味について理解している。おやつを買うことと手作りするもののそれぞれのよさについて理解している。【家庭生活についての知識・理解】

6) 題材について

児童を取り巻く食生活に関する現代的な課題が数多く指摘されている。児童の実際の食生活は、家庭での食事だけではなく、自分で食品を購入して、おやつや食事を済ませる場合も少なくない。つまり、小学校家庭科では、「食品を買うこと」も意図的に教育されなければならない。本題材では、6年生の児童が自分の意思で買う機会が最も多いと考えられる「おやつ」を取り上げ、食品を選ぶことや自分の食生活を考える展開とした。

家庭科教育では、具体的な生活場面で、習得した知識や技能を活用して、判断し、意思決定を行いながら課題を解決し行動する力を身に付け、生活をよりよくしていこうとする資質を育成することが重要であるととらえている。「食品を買うこと」については、食品の情報に関心を持ち、消費者として正しくそれを理解し、目的と状況に合わせて判断する学習活動が重要になると思われる。このような問題解決的な思考過程を重視して題材を構成した。

本学級の児童は、食生活に関する学習に意欲的に楽しみながら取り組んでいる。修学旅行での加工食品の購入の様子を観察すると、買うかどうかの判断基準は、おいしそうかどうかというイメージと価格が適切であるかに偏っている。品質表示をよく見て買っているという児童は少ない。事前のアンケートでも7割以上の児童が、食品添加物が含まれているかどうかは全く気にしていないと答えている。

本題材は、食に関する情報の取り出し、整理、分析、判断という学習過程において、情報活用能力の育成にもつながる言語活動を充実させることができる。家庭生活の中で生きて働く情報活用能力の一つは、「生活の中の様々な媒体を通して得られた情報を生活の文脈の中で有効に活用する」ことであろう。本題材の場合は、商品のパッケージ情報(図1)から加工食品の品質や値段を適切に把握し、目的に合わせて購入するかどうかの判断材料とする。また、情報の活用、思考、判断の過程において、言語を用いることで、考えを一層深めたり、その思考過程を認知したりすることができる。指導にあたっては、生活の場面を想定し、実際の食品の情報を取り出して理解し、それを基に自分の価値観と照らし合わせ、経済性、安全性、環境面など

の合理的な根拠をもって食品を選択する活動をさせる。また、意思決定の過程を主体的に言語化できるように、学習活動を工夫したり、グループ活動を効果的に取り入れたりする。

7) 学習指導及び評価計画(全5時間)

	ねらい	主な学習活動と内容	評価活動
第一次 (2時間)	商品を購入するとき、必要な情報について関心を持ち、調べる。(2)	○日常生活でおやつやジュースをどのように選んでいるか想起する。 ○おやつを買う場合、お店ではどのように選んでいるか想起する。 ○自分のおよつの選び方に問題点はあるか考える。	(教師評価) 自分のおよつの選び方について振り返っているか。 (教師評価) およつの選び方や買い方に課題や関心をもっているか。
	パッケージには、どのような情報が載っているのか調べよう。		
第二次 (1時間)		○お菓子の袋の表と裏面に載せられている情報には、どのようなものがあるか調べる。必要で正確な情報と広告としての情報とに色分けする。 ○加工食品の歴史と食品添加物について知る。 ○「賢い消費者」になるためには、商品を選ぶときにどのようなことに気をつけたらよいか、考えをまとめる。	(教師評価) 加工食品の品質の情報を読み取ろうとしているか。
	実際の生活場面を設定し、加工食品の情報を取り出し、それらを活用して、食品を選ぶ。(1)	○加工食品を選択するときの観点について前時の学習内容から想起する。	(教師評価) 加工食品を選ぶ観点について理解しているか。
目的に合わせておやつを選ぼう。			
第三次 (2時間)		○「明日からのキャンプに持っていく夕食後のヨーグルト10人分を選ぶ」という設定で、数種類の加工食品の中から根拠をもって選ぶ。 ○「今日の3時に家族で食べるおやつを選ぶ」という設定で数種類の加工食品の中から根拠をもって選ぶ。 ○目的が異なったことにより、選ぶ観点がどのように変化したのか、意見を交流する。	(教師評価) 食品の情報を取り出して、それをもとに思考判断して選ぶことができているか。 (自己評価) 自分なりに工夫して、様々な観点から加工食品を選ぶことができたか。
	買った加工食品と手作りのそれぞれのよさについて考える。(2)	○市販のリンゴジャムの品質表示を読み取り、試食してみる。	(教師評価) ジャムの品質表示を読み取ることができるか。
おやつを買うことと手作りするもののそれぞれの良さを比較してみよう。			

ねらい	主な学習活動と内容	評価活動
	<p>○リンゴジャムを作る。また、つくったリンゴジャムをおやつとして食べられるように、ロールサンドを作る。</p> <p>○試食する。</p> <p>○調理実習や試食からわかったことについて発表する。</p>	<p>(教師評価) 適切にリンゴの皮をむき、なべで煮ることができるか。</p> <p>(自己評価) 簡単なおやつを用意ができたか。</p> <p>(教師評価) おやつを買うことと手作りすることそれぞれの良さについて理解しているか。</p>

8) 本題材における言語活動の充実の視点と成果

第二次における事例を示す。実際の生活場面設定し、ヨーグルトの情報を取り出し、それらを活用して、食品を選ぶという学習活動では、思考判断をするために、多様な観点をワークシートに書き出し、観点の優先順位を価値観や合理性に照らし合わせて決定し、情報を整理してから、選べるようにした(図2)。単に、「よく考えて選びましょう」というだけでは、児童が意思決定の過程を明確に認知することはできないと考えたからである。

また、生活場面の設定も、児童が実際に会いそうな場面を具体的に示した。また、学習活動にリアリティをもたせるために、8種類のヨーグルトの中から目的にあったおやつを選ぶという設定にし、食品売り場での状況をできるだけ教室で再現できるように資料や実物を用意した。

図2から、児童が複数の観点からヨーグルトを選択している様子が見える。これらは、日常の購入場面では、無自覚に思考していることであるが、言語化することによって改めて客観的に認識することができる。また、生活の場面が変わることによって、選択するヨーグルトが変わることも、その根拠とともに認知させることができたと考えている。



図1 パッケージから情報を読み取るための資料

おやつを選び方を考えよう(3)

2部 6年 名前()

目的に合うおやつを選び方を考えよう。

場面①
11月5日からキャンプに行きます。6日の朝食後のデザートにヨーグルトを選んで買って頂くになりました。1年生から6年生の10人分、予算は800円。

とても重要 ← → さほど重要ではない

観点	①賞味 期限	②価格	③内容量	④味	⑤ゴミ	⑥復 習 材	⑦特 保	
①ブルガリアヨー グルトプレーン	11/9	¥148	450g	△	紙 コップ	大	○	明治
②フルーツヨ ーグルト	11/7	¥298	400g	○	紙 コップ	大	×	グリコ
③カルシウム ヨーグルト	11/15	¥198	70g×4	△	紙 コップ	小	×	チチヤス
④チチヤスヨ ーグルト	11/6	¥158	85g×4	◎	紙 コップ	小	×	チチヤス
⑤ぶどうヨー ーグルト	11/14	¥198	80g×4	△	紙 コップ	小	×	明治
⑥りんごヨー ーグルト	11/5	¥198	75g×3	◎	紙 コップ	小	×	グリコ
⑦ソフール	11/14	¥78	100mL	△	紙 コップ	小	○	ヤクルト
⑧ブルーンヨ ーグルト	11/8	¥98	110g	△	紙 コップ	小	×	カヨー

場面① 選んだおやつ

チチヤスヨーグルト

小分けしてあるし、11パックあたりの量(小分けしたに分)
が1番多い。しかも、安い。11パックはあけて、10こだ
け買って行けば◎。歴史もあって、しかもめん
物があまり使われていない。乳清もおいしい。

場面②

今日、3:00に家族でたべるおやつを買います。

場面② 選んだおやつ

りんごヨーグルト

3人家族で、(ピ、タ)だし、家族にもなじみがあって
おいしいとわかってるから、みんな食べたいと思
える。しかも、りんごが入って、栄養もあるから
いいかなと思った。にあたりはたかいいけど、お
いしい十角切りだからしかたない。



図2 児童のワークシート
(おやつを選び方を考えよう)

(2) 生活への感性を育むための授業例

【生活への感性を育む言語】、④生活に関する事柄を豊かな言語で表現する活動に着目した具体的な学習活動の展開および成果について述べる。

〈家庭科学習指導案〉

(指導者 広島大学附属小学校教諭 森下 友紀)

- 1) 日時 平成23年12月1日 1校時
- 2) クラス 広島大学附属小学校 1部5年
(男子20人, 女子19人, 合計39人)
- 3) 題材名 「味わって食べよう」

4) 学習指導計画 (全1時間)

第一次 味わって食べよう (1時間)

5) 題材の目標

- 五感を使って食物を味わって食べることのよさに気づき、関心をもつ。【家庭生活への関心・意欲・態度】
- 味には、甘味、塩味、酸味、苦味、うま味があり、それぞれの味を理解している。【家庭生活についての知識・理解】

6) 題材について

味の感想を「おいしい」あるいは「まずい」としか表現できない児童は少なくない。味の濃いものが好まれる傾向にあり、様々な添加物によって味付られ、本来の味や色が失われている加工食品も多く出回り、食べ物もつ本当のおいしさを味わって食べる機会は減少してきている。調理実習の後に自由記述による自己評価では、「おいしかったので、よかった」といった表現でしか記述できない場合もある。本来、食べ物を味わうとき、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚といった五感を使って味わっている。しかし、そのことに多くの場合、気づいていない。日本語には、食感を表現する言葉は、400語以上あるそうだ。それは、フランス語の約250語や中国語の約150語と比較しても多く、それを通して、日本人が食生活を楽しみ、文化として受け継がれてきたことをうかがい知ることができる⁹⁾。

そのような豊かな言語を実体験をともなって理解したり、自分が作った料理について分析的に言葉を使って表現できることは、食生活への関心を高めたり、調理に関して適切な自己評価をする能力を身に付けたりする上で重要な役割をはたすことができると考えられる。また、生涯にわたって、食生活を楽しみ、本当の意味での食の豊かさを実感する礎となることが期待できる。本授業は「子どもの五感を目覚めさせる味覚の授業 (日本味覚教育協会 内坂芳美著)」¹⁰⁾を参考に計画した。家庭科の学習として位置付けるためには、味覚についての学びを、調理や献立作成の学びへとつなげていく必要がある。

「言語活動の充実」に本題材を照らし合わせると、生活の様々な事象を実感の伴う生きた言葉として理解することにより、人が生活を営むことのよさやその価値に触れ、生活への感性を高めていくことができるようになることが期待できる。感性は、感じたことを言葉にしたり、言葉を交流したりすることによって一層育まれていくものである。そのような豊かな感性・情緒を通して、良好な人間関係を築くことにもつながると考えられる。

学習指導要領解説家庭科編には、内容「B日常の食事と調理の基礎」において「食材やその調理過程、で

き上がった料理の味や食べ方などに関心をもち、意欲的に調理の計画に取り組むように配慮する。」とある。小学校における家庭科の食生活に関する学習において、食を総合的に学び、食べることそのものに対する関心を高めていくために、「味」に気づく学びを意図的に計画してことが大切であると考えた。

指導するにあたっては、あたりまえに思っていた味は、いろいろな味覚が複合的に混ざり合っつけられていることに気が付かせたい。そのために、まずは、一つひとつの味覚を五感を使って実際に味あわせたい。そして、いつも食べているものを丁寧に味わい、それを言語で表現し伝え合わせることで、似た表現、異なる表現にも出会わせたい。また、本時の前に、本学級の児童は、調理製菓専門学校教師による食育授業を受けており、プロが作ったカツオと昆布の出汁を味わい、「うま味」については驚きをもって味わう経験をしている。

7) 学習指導及び評価計画 (全5時間)

	ねらい	主な学習活動と内容	評価活動
第一次 (1時間)	味には、甘味、塩味、酸味、苦味、うま味があり、それぞれの味を理解し、味わって食べることに関心をもつ。(1)	○「味とはなんですか」という発問から、味覚には酸味、甘味、塩味、苦味、うま味があることを説明する。 ○食べ物を味わって食べることの良さについて知る。	(教師評価) 酸味、甘味、塩味、苦味について実感をとも理解する。
	五感を使って味わおう。		(教師評価) 五感を使って食物を味わって食べ、自分なりの言葉で表現している。
		○塩味は塩、酸味はお酢、苦味はチョコレート(カカオ92%)、甘味は砂糖を味見し、言語と味を結びつける。五感を使って味わうことができるようにする。 ○マドレーヌ(原材料:小麦粉、砂糖、卵、バター、レモン)を五感を使って味わう。塩味、酸味、苦味、甘味のどの味を感じたか、どのようなおいしさを感じたか、自分の言葉で表現する。 ○味わうことの良さや、おもしろさについて話し合う。	(教師評価) 味わって食べることに関心をもつ。

8) 本題材における言語活動の充実の視点と成果

マドレーヌを味わった時の児童のワークシートの記述内容を示す。

- ・もちもち感があり、とてもやわらかかったです。また、すごく甘味があって、とてもおいしかったです。マドレーヌの甘味の中に酸味があって、ちょうどいい甘さでした。
- ・とても甘い香りです。よく焼けていて見てもおいしそう

うです。甘いのですが甘すぎないので、大人の人向けではないでしょうか。オレンジの味も感じられて、ちょうどいい酸味具合です。

・甘味の中にレモンのような酸味があり、口の中で、甘味が先、酸味が後で広がる。焼き色はきれいな茶色で、香りはやさしい感じのにおいがする。とてもおいしい。

・ふんわりしっとりしていて、甘さの中にほんのちょっとレモンのような酸味が感じられた。

このように、児童は、酸味、甘味、塩味、苦味を意識して分析的に味わっている。また、味だけでなく、五感を通して表現しようとしている。言語化することで「甘くておいしい」マドレーヌという味わい方から、どのようにおいしいのかということを知り表現しようとしている。また、よく味わって食べることの豊かさにも気づくことができたのではないかと。

この授業の前日と授業後の給食について、「○○（献立名）は、どんな味ですか。」と児童に質問をして、質問用紙に答えを記入させた。授業前の献立は、ジャガイモのさっぱりサラダ、授業後の献立は、けんちん汁であった。

児童M

前) さっぱりしていて、おいしい!!!

後) 塩味がきいていてとてもおいしい。野菜の甘みもほんのり感じられて、塩味とマッチしている。

児童S

前) 少しすっぱい。食感がいい。コーンが甘い。

後) 塩味がある。きのこやお肉のうま味がでていた。色とりどりできれい。大根からうま味があふれていた。

児童H

前) 彩りがすてき。少しすっぱい。さっぱりしておいしい。

後) 野菜の香りがする。にんじんの色が鮮やか。大根がしゃきしゃきしている。にんじんはやわらかく甘さがある。全部の野菜にお汁がしみ込んでいておいしい。

授業前と後では、味に対する評価が分析的になっていることがわかる。また、食材の一つひとつを意識して味わっている様子である。

このような力を育むことで、例えば「おいしくゆでみよう」という学習課題で調理実習を行った時に、試食による自己評価を行う際、どのようにおいしくゆでることができたのかを五感を通して分析することに

つながっていく。味だけではなく、彩りや食感にも気をつけて、調理のコツをとらえることができるであろう。日常の食生活においても、食べている料理の感想を伝え合うことで、会話が弾んだり、調理してくれた人や食材への感謝の気持ちを現したりすることができ、より豊かな食生活を創造していくことにつながっていく。

4 まとめ

本報では、家庭科という教科独自の言語活動について考察し、教科が担うべき5つの具体的な言語活動を挙げ、その内の2つの言語活動を柱とした授業実践を行い、成果を述べてきた。言語を用いることで、児童にとって無意識であった日常生活を改めて客観的に認識することができ、そのことで、生活の科学性を理解したり、価値あるものとしてよさに気づいたりすることができることがわかった。

他の3つの言語活動についても、実践を積み上げ、家庭科の目標実現に向けて効果的な学習方法について模索していきたい。

引用（参考）文献

- 1) 文科省『学習指導要領解説 総則』2008
- 2) 文科省『学習指導要領解説 家庭科編』2008
- 3) 文部科学省『言語力の育成方策について（報告書案）』2007
- 4) 言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】（文部科学省 2011）
- 5) 鈴木明子 “21世紀に求められる家庭科学習” 21世紀型学力を保障する教育課程の創造—教科カリキュラムの創造—研究紀要34号 広島大学附属小学校 2006
- 6) 長澤由喜子 鈴木明子『小学校教育課程講座 家庭科』ぎょうせい 2008
- 7) 多々納道子 福田公子『教育実践力をつける家庭科教育法』大学教育出版 2005
- 8) 筒井恭子 “家庭科における言語活動の充実とその具体化”『初等教育資料』東洋館出版社 2011 7月
- 9) 早川文代「食感表現の豊かな日本語」『たべものがたり』ダイヤモンド社 2009
- 10) 内坂芳美『子どもの五感をめざめさせる味覚の授業』合同出版社 2007